



---

# 「誰もいなくなった」

ミャンマー・ラカイン州の  
ロヒンギャを襲う死と暴力

# 目次

01 序論	5
02 「虐殺に遭った」——何千人もの死	8
2.1. 死亡率の急上昇	8
2.2. 「たくさんの遺体」——人命喪失の目撃者	10
03 「群衆への乱射」——広がる暴力	11
3.1. 背景	11
3.2. 極度の暴力	11
3.3. 暴力被害の形態	12
04 「誰もが標的に」——無差別な暴力	16
4.1. 性別を選ばない暴力	16
4.2. 子どもと老人に対する暴力	17
4.3. 「ここの方が安全」——暴力の現場	17
05 「皆が強姦被害に」——広がる性暴力の乱用	18
06 「ここで死ぬ方がマシ」——帰国への不安	22
07 結論	23
08 付録 1 : 調査方法	25
量的分析	25
質的分析	26

## 結論

表紙 © Moises Saman/MagnumPhotos for MSF

Bangladesh・コックスバザール県付近のキャンプに向かうため  
移動許可を待つミャンマーからのロヒンギャ難民。  
 Bangladesh入りした直後、水田地帯でモンスーンの雨に降られ  
雨宿り先を探すが、国境警備隊にはその場にとどまるよう命じられている。

Art Direction & Design: Atomodesign.nl

© 2018 Médecins Sans Frontières

# 序論

2017年8月25日午前、ミャンマー軍がラカイン州で開始した「掃討作戦 (clearance operations)」<sup>1</sup> は、表向きは国境警備警察 (BGP) 派出所に対するロヒンギャ武装勢力の組織的な攻撃に応じたものだった。

その結果、ロヒンギャを中心に68万8000人が同州から隣国バングラデシュに逃れたとされる。<sup>2</sup> 避難の速度と規模から深刻な人道危機が発生し、過去に避難していた人びとと合わせると、バングラデシュ国内のロヒンギャの数は90万人を超えた。<sup>3</sup> その大半が現在、コックスバザール県の既存のキャンプおよび仮設居住地の拡張部分や自然発生的な新しい居住地、そして地域社会の中で暮らしている。

8月25日以降、ラカイン州内の異なる場所から来た相当数の患者が、住居や村落の襲撃、無秩序で無差別な発砲、親類や隣人の刺殺や射殺、避難路に散らばる遺体、広範囲の破壊、性暴力など、ロヒンギャを狙い拡大する暴力を国境なき医師団 (MSF) に報告している。

2017年11月、MSFはこの緊急事態の現状を量的に測るため、コックスバザール県で合計6件の健康調査を実施し、租死亡率等の要素を評価した。4調査所見ではロヒンギャが狙われていることがわかり、8月25日に端を発する広範囲の暴力がかつてないほど明確に指摘された。また、最近バングラデシュにたどり着いた人びとから定期的に情報を収集し、<sup>5</sup> 避難の状況と、直面した暴力の形態をより把握しようとした。

**MSFの推計では8月25日から9月24日までにミャンマー国内で少なくとも9400人が命を落とした。そのうち、少なくとも6700人の死因が暴力だ。**<sup>6</sup> また少なくとも730人の5歳未満児が殺害されたものとみられる。避難の速度と規模が国際社会の目をこの重大な出来事に向けさせた一方で、MSFの死亡率データは、2017年8月25日以降の1ヵ月間に暴力が前例のない水準に達したことを示している。これは、ラカイン州に不正行為は一切ないとし、<sup>7</sup> いわゆる「掃討作戦」の死傷者を過少に見積もる<sup>8</sup> ミャンマー政府の公式声明とは非常に対照的だ。<sup>8</sup>

1 ミャンマー政府の用いている呼称に倣った。

2 部門間調整グループ (ISCG)、『Situation Update: Rohingya Refugee Crisis (現状報告: ロヒンギャ難民危機 (2018年2月11日))』: <https://www.humanitarianresponse.info/en/operations/bangladesh/document/situation-report-rohingya-crisis-coxs-bazar-11-february-2018>

3 上掲資料

4 詳細は付録の調査方法と当該の健康調査報告 ([http://www.msf.org/sites/msf.org/files/coxs\\_bazar\\_healthsurvey\\_report\\_dec2017\\_final1.pdf](http://www.msf.org/sites/msf.org/files/coxs_bazar_healthsurvey_report_dec2017_final1.pdf) <http://www.msf.org/sites/msf.org/files/report-rohingyas-emergency-17-vf1.pdf>) を参照。

5 2017年8月以降に収集された合計81件の証言に基づく報告。詳細は付録の調査方法を参照。

6 これらの調査は今回の集団避難でミャンマーのラカイン州からやって来た50万3698人を代表するもの。当該の調査では、2.26%の人が8月25日から

9月24日までの間にミャンマー国内で亡くなっていることが判明。この比率を対象人口全体に適用すると、暴力的事態の発生後1ヵ月で少なくとも9400人のロヒンギャが亡くなっていることになり、そのうち少なくとも1000人が5歳未満児。調査所見を詳細に見て、信頼区間 (狭ければ狭いほど、標本の代表性は高い) を考慮すると、死亡数は推計で9425~1万3759例、5歳未満児で1008~2896例。このうち、6759~9867例の原因が暴力で、ここに含まれる5歳未満児は734~2109例。

7 8月25日の襲撃に応じた軍隊の不正行為について、国軍監察官の指揮による調査の結果とともにTatmadaw True News Information Teamが発表した公式声明: [https://web.facebook.com/search/top/?q=Tatmadaw+True+News+Information+Team&\\_rdc=1&\\_rdr](https://web.facebook.com/search/top/?q=Tatmadaw+True+News+Information+Team&_rdc=1&_rdr)

ヒューマン・ライツ・ウォッチ「Burma: Army Report Whitewashes Ethnic Cleansing – International Inquiry, Accountability Needed for Justice for Rohingya (ビルマ: 軍の報告がひた隠す民族浄化——ロヒンギャの公正のために求められる国際的な調査と説明)」、2017年11月14日: <https://www.hrw.org/news/2017/11/14/burma-army-report-whitewashes-ethnic-cleansing>

MSFスタッフの治療した負傷、新たに流入した難民の談話、MSFの健康調査の結果のいずれもがミャンマー治安部隊、その関連組織、そしてラカインの群衆による過剰な武力行使と、ロヒンギャ住民に対して振るわれる広範な暴力を示唆している。こうした暴力的な迫害がミャンマー国内のロヒンギャ住民の死亡数を増加させ、生き延びた人びとには避難を強いている。

本稿は主として、MSFが2017年11月にコックスバザール県で行った6件の健康調査の結果を基礎とし、それを8月以降にMSFが日々の活動を通して収集した患者や介護者の談話等の証言を質的に分析することで補完した。直接の医学的観察によって所見を裏付けるため、クトゥパロンのMSF診療所<sup>9</sup> から得た医療データと、MSFの医師、看護師、助産師らが患者から聞いた談話も盛り込まれている。当該の健康調査と証言の収集に用いられた方法は、本稿の付録で詳述する。

8 「……ミャンマー政府はこれまでに約400人が殺害されたと主張しているが、その数ははるかに多いという声もある」(「ガーディアン紙」、2017年9月6日): <https://www.theguardian.com/global-development/2017/sep/06/who-are-the-rohingya-and--what-is-happening-in-myanmar>

9 MSFは2009年からクトゥパロンの診療所でコックスバザール県の活動を継続。この診療所は、今回の大規模流入が始まって以来、MSFが治療した銃創や性暴力などの暴力による負傷患者の大半を受け入れている。これは主に、大規模流入の最初の1ヵ月間に機能していた唯一のMSF医療施設だったため。10月末以降は現地に複数の施設が増設されているが、本稿で考察される医療データはクトゥパロン診療所の患者のものに限られる。

ヤシン・タラさん(20歳)と娘のアスマちゃん(生後10ヵ月)は9月にバングラデシュで難民となった。食べ物と食器が盗難に遭い、ただでさえ困窮していたヤシンさん一家はいつそう心もとなくなってしまった。代わりに傷物の食器を購入し、きれいにして家族のための調理に使おうと考えている。夫は職探しをしているが、難航中だ。アスマちゃんは肺炎にかかり、高熱に苦しんでいる。「子どもたちが学校に通い、生計を立てられるようになって、私たちを助けてくれるといいのですが……」故郷のミャンマーの村で飼育していた牛3頭は軍に奪われ、自宅も焼き払われたという。



# 「虐殺に遭った」

何千人もの死

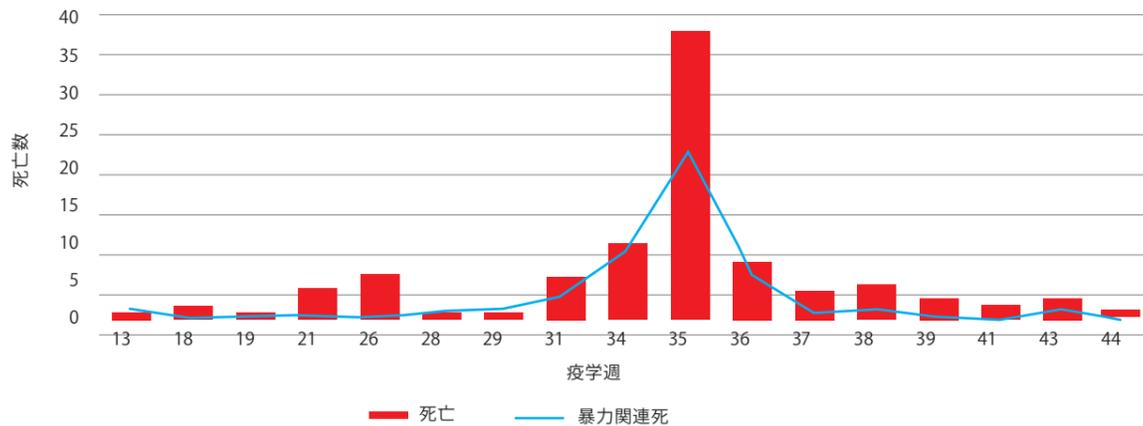
02

8月25日に始まった避難の速度と規模が国際社会に状況の深刻さを警告する一方、独立した人道団体は実質的に一切ラカイン州に立ち入れず、8月下旬の実際の出来事についての情報が不足している。

MSFの死亡率データから、2017年8月25日を起点に暴力が異例の高水準に達したことがわかる。**MSFの推計では、8月25日から9月24日までの間に少なくとも9400人がミャンマー国内で命を落とし、そのうち少なくとも6700人の死因が暴力だった。この6700人には少なくとも730人の5歳未満児が含まれている。**<sup>10</sup>

## 死亡率の急上昇

8月25日から9月24日の期間の死亡率は、5月27日から8月24日までよりも13倍以上高い。<sup>11</sup> **8月25日以降の暴力関連死はラカイン州のロヒンギャ住民に対する過剰な実力行使を際立たせるもので、9月24日までに報告された全死亡例のうち71.7%が暴力に起因するものであった。**<sup>12</sup> 8月25日以後の10日間に暴力死が急増しており、報告された死亡例全体の43.8%がこの期間に発生している。<sup>13</sup>



バングラデシュ・コックスバザール県クトゥパロンとバルカリの新たに流入した難民における死亡例の、報告された原因および週ごとの分布。

02

**新たに流入した難民によって報告された8月25日から9月24日までの暴力関連死の主な原因は銃創(69.4%)<sup>14</sup>で、これに占める5歳未満児の割合は59.1%だった。**<sup>15</sup>暴力で死亡した人のうち8.8%が家屋の火災での焼死。この死因は5歳未満児の暴力死では14.8%に達する。<sup>16</sup> 8月25日～9月24日の期間に暴力で亡くなった人の5%が殴打による死亡。<sup>17</sup> 死を招いたそれ以外の暴力には、性暴力(2.6%)<sup>18</sup>と地雷(1%)がある。<sup>19</sup>また、暴力関連死の12.3%はさらに「その他」の原因によるものだが、調査対象となったクトゥパロンとバルカリの難民は「軍に殺害された」と断定。回答者からは、それ以上の情報は得られていない。バルカリ2とタスニマルコラで調査対象となった難民は「喉を切られた」ことによる死亡例も報告している。<sup>20</sup>

MSFに証言した難民の談話は多人数の死に関するものが中心で、人びとが殺される様子を伝えている。虐殺や集団殺人と表現される例は数知れない。

「夫と子どもたちを殺されました。同じ襲撃で60人ほどが亡くなっています。大勢が虐殺されたんです。それから軍は、その人たちを地面に掘った大きな穴に入れていました」

女性(ブチドン郡サイン・ディー・ブラン/セイン・ニン・ピャー (Sain Dee Prang/Sein Nyin Pya) 出身、2017年11月26日)

隣人や、時には自身の家族が家屋とともに焼死していく姿を目にした人もいる。

「私の母は目が見えないので逃げられず、自宅で焼死しました。私が連れて逃げさせたのは(生後20日の)子どもだけです」

女性(ラテーダウン郡出身、2017年9月13日)

「軍は家やモスクに火を着けていました。……私の自宅も中に幼い息子がいるのに放火されたんです。まだ村に誰が残っているかどうか……」

女性(ブチドン郡出身)

- 14 6件の調査で蓄積された結果に基づく数値(クトゥパロンおよびバルカリで調査対象となった新たに流入した難民における暴力関連死の69%/バルカリ2およびタスニマルコラで調査対象となった滞者における暴力関連死全体の68.7%)。
- 15 6件の調査で蓄積された結果に基づく数値。
- 16 6件の調査で蓄積された結果に基づく数値。クトゥパロンとバルカリで収集された情報によると、自宅で家屋とともに焼死させられた人は暴力死全体の11.9%を占める。その割合は5歳未満児では20%まで上昇する。
- 17 6件の調査で蓄積された結果に基づく数値。バルカリ2とタスニマルコラで収集された情報によると、殴打で死亡させられた人は暴力死全体の19.5%を占める。その割合は5歳未満児では26.1%まで上昇する。
- 18 6件の調査で蓄積された結果に基づく数値。
- 19 6件の調査で蓄積された結果に基づく数値。バルカリ2とタスニマルコラで収集された情報によると、地雷に命を奪われた人は暴力死全体の3.6%を占める。この死因に関するクトゥパロンとバルカリの情報は無い。
- 20 バルカリ2とタスニマルコラで収集された情報によると、喉を切り裂かれて殺害された人は暴力死全体の1.5%を占める。

	総数	5歳未満児
暴力(全死亡例に占める割合)	71.7%	72.8%
<b>暴力死の原因</b>		
殴打	5.0%	6.9%
性暴力	2.6%	0.0%
銃撃	69.4%	59.1%
家屋の焼き討ち	8.8%	14.8%
地雷	1.0%	2.3%
拘束・拉致	0.3%	0.0%
のどの裂傷	0.2%	0.0%
不明	0.4%	2.3%
その他	12.31%	14.8%

8月25日以降に亡くなった人の大半は、ミャンマー国内の自宅<sup>21</sup>ないし地元の村落<sup>22</sup>、または、バングラデシュへの途上で命を落としている。<sup>23</sup>

**暴力は8月25日からの1ヵ月間が特に激しかったが、その期間を過ぎても続いた。**9月25日から振り返り期間（10月30日～11月12日）が終わるまでに報告された死亡例の11.1%が暴力に起因する。<sup>24</sup> 新たに流入した難民による証言は、村落の住民の無差別殺戮などの暴力が10月と11月を通じてラカイン州各地で継続していたことを裏付けている。

「ミャンマー国内ではまだ暴力が鎮まっています。私たちが逃げ出した日も、人びとが殺害されていました。……こちらには12日かけて、今日着いたところです」  
男性（ブチドン郡出身、2017年10月19日）

### 「たくさんの遺体」——人命喪失の目撃者

「野山や川を越えて4日も歩き続けました。通りかかった村の多くは焼け落ち、誰もいなくなっていました。道なりに遺体が横たわり、子どもたちがおびえていたので、近づかなくて済むように私たちが間に割って入るようにして歩かなければなりませんでした」  
男性（ブチドン郡ヌーア・バラ／ユワー・ティット（Nua Para/Ywar Thit）出身、2017年10月29日）

**大勢の難民が国境への道のりで遺体を目にしたといい、その数は時に何十人にも及ぶ。**そうした報告が特に多いのはブチドン郡出身の難民だ。これは、バングラデシュ国境まで徒歩で少なくとも1週間という距離が理由かもしれない。地元の村落を離れる前に遺体を埋葬したという難民も少数ながらいる。

「軍が立ち去った後、夫が村の人たちと協力して、1つのお墓に20人の遺体を埋葬しました。それから、全住民が村を離れたのです。村から村へと渡り歩いておよそ1週間。こちらまで来るのに合計2週間かかり、そのうち1週間は丘陵地帯で費やしました。40人を超える数の遺体に覆われた丘もあり、歩くことさえままなりませんでした」  
女性（ブチドン郡、2017年9月11日）

バングラデシュへの途上で、首のない遺体や人体の一部を見たという人や、燃えている遺体を見たというもいる。

「隣村で燃えている家を目にしました。どうやって火を消したのかは知りません。その後、私たちは一家でバングラデシュに来たのです。……その途中もたくさんの遺体を見ました。女性も含め首のないものが多かったです」  
女性（40歳、ブチドン郡、2017年9月11日）

「途中で目にした人たちは首をはねられており、身体の一部が川にも落ちていました。通りかかった村落で燃やされる遺体のおいもかぎました。ここ2ヵ月、眠れずにいます」  
男性（ラテーダウン郡ソー・パラン／ベット・レイ（Zoe Parang/Phet Leik）出身、2017年11月4日）

「あいつらは小さな子どもの身体をばらばらに切り刻み、男性を選び分けて、全員殺しました。それから、遺体を残らず運び、火の中に放り込んだんです。現場の近くに私たちの住まいがあり、一部始終が自宅から見えました。」

女性（ブチドン郡ラ・バ・ダウン／パ・ラン・チー（La Ba Daung/Pa Ran Kyi）出身、2017年11月26日）

21 クトゥパロンとバルカリで収集された情報によると、ミャンマーの自宅で亡くなった人は死亡例の39.7%を占める。この死因は5歳未満児では20%まで増大する。バルカリ2とタスニマルコラで収集された情報はない。

22 バルカリ2とタスニマルコラで収集された情報によると、ミャンマーの地元村落で亡くなった人は死亡例の71.4%を占める。この死因について、バクトゥパロンとバルカリで収集された情報はない。

23 クトゥパロンとバルカリで収集された情報によると、バングラデシュへの途上で亡くなった人は8月25日から9月24日までの死亡例の41.3%を占める。バルカリ2およびタスニマルコラで調査対象となった避難者においては、8月25日から振り返り期間が終わるまでの死亡例の10.7%が国境のミャンマー側で、6%がバングラデシュ側で発生していた。

24 クトゥパロンとバルカリのみで収集された情報。

# 「群衆への乱射」

## 広がる暴力

「ミャンマー当局にずっと虐げられていましたが、私はイードの祭日（7月25日）を最後に自宅に戻っておらず、家族にも会っていません。その間、軍から2人の娘を守るために密林に隠れていたからです。私たちはとても耐えられないような目に遭わされ、国を出るしかなかったのです」

女性（30歳、マウンドー郡チャ・マウン／チュン・パウッ・ピュー・スー（Kya Maung/Kyun Pauk Pyu Su）出身、2017年8月16日）

## 背景

ミャンマー国内のロヒンギャは歴史的に法制上でも実生活でも迫害と根強い差別にさらされ、これが過去何年もの間のラカイン州や周辺諸国への避難につながってきた。2016年10月には、ミャンマー軍がロヒンギャへの大規模な取り締まりを開始。表向きは、相当数の警察の派出所と軍事基地に対する「アラカン・ロヒンギャ救世軍」（ARSA）の襲撃に応じたものだった。それ以来、大勢のロヒンギャが殺され、それ以上に多くがバングラデシュに避難している。

ラカイン州の状況は8月25日以前から緊迫し、一触即発だった。8月25日以前に地元の村落が襲撃されたという報告をMSFの複数の患者が寄せており、5月以降の暴力増加を伝える報告もある。また複数の談話で、ミャンマー当局が治安作戦を2017年7月から強化したことも示唆されている。

MSFの調査によれば、2月25日からこの調査を実施するまでの間に暴力を受けたという人は平均して3.7件の暴力事件に遭っている。<sup>25</sup> 暴力を経験した回答者の割合の高さを考え合わせると、ラカイン州のロヒンギャの直面する暴力が継続的なものだったことがうかがえる。

2月25日から8月24日までの期間も致命的な結果に至った暴力は多く、報告されているラカイン州内の死亡例の28%は暴力が原因だった。<sup>26</sup> MSFの患者の談話が8月25日以前も繰り返されていた暴力的な出来事を裏付けている。

25 クトゥパロンとバルカリのみで収集された情報。

26 クトゥパロンとバルカリのみで収集された情報。

## 極度の暴力

「軍は15日ごとにやって来ました。住宅に押し入り、男性を殴打し、女の子を強姦することもありました。以前は村に来ると、きれいな女の子だけを連れ去っていたんです。今は高齢の女性も幼い女の子も皆が強姦されます。虐げられています」

女性（マウンドー郡クワンセ・バウン／クワン・ティー・ピン（Kwanse Baung/Kwan Thi Pin）出身、2017年10月22日）

**MSFのデータによると、最近避難を余儀なくされた人の少なくとも21.5%が8月24日から9月25日までの間に暴力を経験している。**新たに流入した難民がミャンマー国内で経験した暴力的な事件の大多数（84.8%）が、この期間のものだ。このような暴力事件の増加は、8月25日以降ラカイン州における暴力の激化を裏付けるものである。

大規模流入が始まって以来<sup>28</sup>、暴力関連の負傷でMSFのクトゥパロン診療所の治療を受けた患者224人<sup>27</sup>のうち、29%は最初の2週間以内の受診。<sup>29</sup> 今回の避難でバングラデシュに来た初期の難民は、ARSAが実行したという8月25日の襲撃の発生地であるマウンドー郡の国境地域の住民で、バングラデシュ国境近くにいたため早期に治療を求めることができた。9月に入ると徐々に、より国境から遠く、徒歩で数日を要する地域の人びともやって来るようになった。

27 MSFのクトゥパロン診療所は2009年から運営されており、2017年8月に集団移入が始まった時点で既に存在していた唯一のMSF施設。本稿執筆時点では、複数の新しいMSFの診療所が開設されており、暴力関連の負傷の治療にあたっている。ただし、本稿に含まれる医療データはMSFクトゥパロン診療所の患者のものに限られる。

28 この数値は暴力に遭いMSFのクトゥパロン診療所に治療を求めたロヒンギャ難民だけを反映した。MSFは難民受入地域の人びとにも、暴力関連の負傷その他の治療を提供している。

29 疫学週第34～35週、すなわち8月21日から9月3日までのデータ。

「2016年10月のラカイン州における暴力ばつ発の後に治療した患者と比べ、今回見られる負傷は新しく、1～2日前に負ったものです。この点が前年と異なります。<sup>30</sup> 前年にあたる2016年の患者の受傷は何週間か、さらには何か月か前でした」

MSF看護師スーパーバイザー（クトゥパロン診療所2017年8月28日）

MSFのクトゥパロン診療所を訪れる銃創患者の数は9月25日からようやく減少に転じたことから、それまでの1カ月間を通じて暴力が続いていた様子がうかがえる。MSFの医療チームは今もクトゥパロンの施設と、10月末以降に開設した新しい施設で暴力関連の負傷者を診察。銃創患者もいるが、大半は追加的なケアの必要な古い傷だ。

### 暴力被害の形態

「一晩中、発砲が続いていて、私も銃声を耳にし、翌朝にはもう耐えられない状況になりました。皆が寄り集まって軍と向き合い、私と兄弟たちもそれに加わっていました。ただ、武器を手にしていない人はいません。軍はいったん立ち去ったものの、増員してまたやって来て、群衆に乱射し……。私の兄弟のうち1人が撃たれて亡くなりました。複数のヘリコプターが家屋に火を着け、私たちがその場を離れ、皆で野原に向かった時も放火を続けていました。私自身も逃げる途中で撃たれました」

男性（23歳、マウンドー郡ボリバザール／  
ディヨル・トリ（Bolibazar/Diyol Toli）出身、2017年8月30日）

バングラデシュに新たに流入した難民が8月25日から9月24日までの間に遭った暴力被害のうち男女両性を合計して最も多かった形態は銃創（76.2%）で、殴打（60%）がこれに次ぐ。<sup>31</sup> 大規模流入が始まって以来、MSFスタッフが治療した暴力関連の負傷は銃創の他、爆傷、熱傷、鈍傷、打撲傷、骨折など。8月21日<sup>32</sup> から12月3日の期間にMSFのクトゥパロン診療所で暴力関連の負傷の治療を受けた難民224人のうち、163人が銃創を負っていた。<sup>33</sup>

「8年前からここにいますが、これまでで最悪の光景です。前年と同様、多くの患者の背中に銃弾の射入口が見られます。これはMSFが収集した『逃げる際に銃撃された』という証言とも一致するものです」

MSF看護師スーパーバイザー（クトゥパロン診療所）

**MSFスタッフに証言を寄せた難民の大部分は自らが銃撃の被害者<sup>34</sup> であるか、そうでなければ目撃者であった。**銃撃事件の大半は村落での乱射とされ、中には家屋や、逃げていく人びとに向けられたものもある。

「近づきはしませんでした。山間からも村の様子が見えました。あいつらは、土下座して助けを請う人にまで銃口を向けていました」

男性（ラテーダウン郡ソー・パラン／ペット・レイ  
（Zoe Parang/Phet Leik）出身、2017年11月4日）

難民の寄せた証言には身体的な暴力の事例も多く、その大部分が殴打か刺突で、致命傷になったものもある。

「軍は女性を集めて建物に連れ込むと刺したり、殴ったりしていました。耐え切れず亡くなってしまった人もいます。私も兵士の1人に喉とあごを刺されました。片手も叩かれましたが、何を使って叩かれたのかは覚えていません」

女性（35歳、マウンドー郡トゥラ・トリ／  
ミン・ジー・ユワ（Tula Toli/Min Gyi Ywa）出身、2017年9月14日）

30 2016年10月のミャンマー軍による掃討作戦の後にロヒンギャ難民が大挙して流入したことを指す。表向きは、治安部隊9人が亡くなったラカイン州北部の国境警備警察（BGP）への一連の武力攻撃に応じたもので、軍とBGPの合同作戦遂行中は地域一帯が完全に封鎖された。

31 クトゥパロンとバルカリのみで収集された情報。

32 疫学週第34週～第48週

33 この数値には当該期間にMSFが治療した受け入れコミュニティの暴力関連負傷者は含まれていない。

34 MSFから銃創の治療を受けた患者（または、その介護者）の証言を含む。

モグ（Mogh）<sup>35</sup> がたびたび村にやって来て女の子を連れて行き、拒否すると拷問するんです。大勢の女性が拷問（性暴力<sup>36</sup>）に遭っていて、私もそういう隣人を少なくとも4人か5人は知っています。私自身の経験はそれよりもマシでした。たくさんの女性が虐げられていますが、話題にすることはありません。（被害者が）未婚だと、誰からも結婚相手と見なされなくなってしまうので……」

女性（35歳、マウンドー郡メイ・ルラー／  
ムイン・ルート（Mey Rullah/Myinn Hlutt）出身、2017年8月30日）

調査対象となった難民のうち、8月25日から9月24日までの間に「その他」の暴力を経験した人（28.1%）の大部分は、自宅を焼き払われた（全暴力事例の8.5%）、他の人が銃撃される姿を目撃した（22.2%）、または、金銭を強奪または恐喝された（1.4%）と語っている。その他の暴力には殴打の被害や目撃、さらに拘束や拉致が含まれる。<sup>37</sup>

MSFスタッフが耳にした証言は、今回の調査における放火関連の所見と符合する。<sup>38</sup> 大半の難民が、自宅に火を着けられた、家屋や村落に放火された、ないしは、バングラデシュへの道のりで焼け落ちた村を通り過ぎたと報告している。

「2日後に地元の村を離れたのは、軍が住宅に火を着け始めたからです。村を出たところに軍が到着し、家々に火を着けているのが見えました。住民は皆、退去し、家畜まで連れ出した人もいます。海に向かう途中で目にした村はどれも火を上げていました」

女性（26歳、ブチドン郡ルダン・バラ／  
ワ・パ・チュン（Ludang Para/Wa Ra Kyun）出身、2017年9月10日）

調査対象となった難民のうち、「その他」の場所で暴力を経験した人の中からは、「国境警備警察（BGP）の宿営地」と呼ばれるところで発生した暴力に関する報告もある。回答者からはそれ以上の詳細は得られず、当該の宿営地の位置と厳密な機能は不明。

「私の息子は軍の宿営地に2回も行かされ、無報酬で働かされていました。2日留守にした後で帰宅し、それから1週間して、また2日戻って来ませんでした」<sup>39</sup>

女性（ブチドン郡出身、2017年10月19日）

MSFの患者と難民から寄せられた証言はしばしば「宿営地」や「軍の宿営地」と呼ばれる場所に連れて行かれた人による報告とも一致。少年を含む男性が強制労働のために拉致されたという声も複数あり、行方不明者の報告も数多い。少女と若い女性も連れ去られたとされ、難民はその理由を伏せたがるものの、一部から性的虐待および搾取がほのめかされている。<sup>40</sup> 行方不明と、男性を狙い撃ちにした理不尽な拘束の報告も多いが、女性や子どもの行方不明例もある。

「攻撃と軍による殺戮に先立ち、警察が村々のイスラム教徒を捜索し、自宅にナタがあるというだけの理由で捕まえていました。私たちの使うナタは林でまきを割るのに使うものです。拘束された人は監獄に連れて行かれたまま戻って来ず、消息は分かりません。殺されたのか、収監されているのかもわからないのです」

男性（22歳、マウンドー郡トゥラ・トリ／  
ミン・ジー・ユワ（Tula Toli/Min Gyi Ywa）出身、2017年9月20日）

35 ロヒンギャの人びとがラカインの非ムスリム住民の呼称として用いる言葉で、蔑称と受け取られることもある。

36 「拷問（torture）」という単語は、身体的暴力や性暴力だけでなく、今も続く嫌がらせや搾取など、あらゆる種類の暴力の総称として常々用いられているようだ。「拷問及び他の残虐な、非人道的な又は品位を傷つける取り扱い又は刑罰に関する条約」第一条1の定義のような「拷問」にロヒンギャの人びとが遭わされたか否かの説明は今回の証言収集活動の範疇ではない。

37 クトゥパロンとバルカリのみで集められた情報。

38 損害を生じさせようという作為と故意と悪意をもって建物、未耕地、その他の財産に火を着けることと定義される。

39 インタビュー調査に居合わせた対象者の息子は「強制的な穴掘り」と「田植え」に触れている。

40 性暴力に関する章を参照。

ナフ川をミャンマーからバングラデシュへと渡るロヒンギャ難民。10月上旬の8日間、写真家集団マグナム・フォトのモイセス・サマン氏が訪れたバングラデシュのミャンマー国境地域には、何万人もがミャンマー北部のラカイン州の民族間抗争を逃れて来ている。何年か前から現地にあるキャンプは突如大挙して押し寄せた人びとへの対応に苦慮し、拡張が急がれている。



# 「誰もが標的に」

## 無差別な暴力

「軍がまず殺したのは男の人でした。暴行を受け、撃たれたり、刺されたりしていました。それから、女の人と子どもたちが何人かずつまとめて、村の中の別々の家に連れて行かれたんです。私も7人の人と一緒にある家へ連れ込まれました」

女性(18歳、マウンドー郡トゥラ・トリノ  
ミン・ジー・ユワ(Tula Toli/Min Gyi Ywa)出身、2017年9月20日)

8月25日の直後の48時間は、5歳未満児が1人受け入れられたものの、MSF診療所を訪れる患者の大部分は若い男性だった。8月27日以降は、女性、子ども、比較的高齢の負傷者もMSF診療所にやって来るようになった。

## 性別を選ばない暴力

ロヒンギャに対して振るわれた極度の暴力は男女を選ばない。8月25日から9月24日にかけて、男性の死亡例75%と女性の死亡例の55.6%が暴力によるものだった。<sup>41</sup>

MSFの調査で明らかになったのは、両性の経験した暴力のひどさは同程度で、新たに避難した人びとのうち男性28.4%、女性23.3%が暴力に遭っていることだ。<sup>42</sup> 難民が被った暴力の形態にも性差はないようだが、例外的に性暴力は男性に比べ女性の被害率が高いことには留意すべきだろう。

以上の所見は証言によって裏付けられており、男女ともに暴力を受けている。ただ、難民の談話から、ミャンマー国内で遭った暴力の形態と状況には性差がうかがえる。複数の事例で、女性や少女が男性や少年から引き離され、集団で別々の場所に「連れ去られた」。女性と少女に対する性暴力の報告は特に多い。

41 クトゥパロンとバルカリで収集された情報。バルカリ2とタスニマルコラでこれに対応する数値は、8月25日から11月12日までに報告された男性死亡例の82%、女性死亡例の68.2%。

42 クトゥパロンとバルカリのみで収集された情報。

43 ロヒンギャの人びとがラカインの非ムスリム住民の呼称として用いる言葉で、蔑称と受け取られることもある。

女性と少女は殴打などその他の形態の身体的暴力にもさらされた。

「8月25日の晩、家の外に出ると私と家族を襲ったモグ43がそこにおいて、そのうちの1人に年老いた母を殺されました。私自身もあいつらに背中を力いっぱい殴られ、いまだに痛くてろくに歩けません。おびえて泣き叫んでいた息子はもう1人の同じ年頃の男の子とともに連れて行かれました。誰も2人がまだ生きていたとは思わないでしょう。あの子が苦しんで死んだのではないことを祈るばかりです」

女性(35歳、マウンドー郡フワイラ・バザールノ  
カ・モン・セイツ(Fwaira Bazar/Kha Mon Seik)出身、2017年8月27日)

MSFの調査によると、調査対象となった人全体に占める20～24歳の男女の数は少なく、15～44歳の年齢層では女性よりも男性が少ない。ラカイン州に比較対象となる人口データがなく、この調査における成人男性のサンプル数が十分でないため、分析することは難しい。過去の出来事を反映しているのか、または最近の出来事を反映しているのか、あるいは、今回の危機以前の人口配分に沿っているのかは定かではない。

今回の大規模流入の初期から収集された証言を分析すると、**強制労働のために宿営地に送られることや、男性の拘束または集団殺害など、男性を標的にした相当数の事例が明らかになる。**調査において男性のサンプル数が少なかったことについて説明できる確かな根拠を得るには、そうした事例の報告を引き続き追求する必要があるだろう。

「イスラム教徒が殺された他の村からの情報によると、男性が第一の標的でした。私は他の男性何人かと一緒に泳いで運河を渡り、密林に身を隠したんです。そこから、この目で村の人たちの様子を見ました。男性が殺されていました。虐殺です。撃たれたり、刺されたりして亡くなっていきました。軍はトゥラ・トリ村の男性の3分の2を殺してしまっただけです」

男性(22歳、マウンドー郡トゥラ・トリノ  
ミン・ジー・ユワ(Tula Toli/Min Gyi Ywa)出身、2017年9月20日)

## 子どもと老人に対する暴力

ミャンマーのロヒンギャに対する暴力は年齢も選ばない。MSFの推計によると、8月25日から9月24日にかけて少なくとも730人の5歳未満児が暴力で亡くなった。8月25日以降に殺害された、この推計730人のうち59.1%が射殺、14.8%が自宅での焼死、6.9%が殴打での死亡だった。

**高齢層の死亡率も極めて高く、8月25日から9月24日の期間に50歳以上の5.47%が亡くなっており、<sup>44</sup> 大半が暴力死だった。<sup>45</sup>**

暴力による死は全年齢層に及び、とても若い5歳未満児でも8月25日から9月24日の死亡例の72.8%<sup>46</sup> が暴力によるものだった。難民と患者から寄せられた体験談が、とりわけ残酷な子どもの殺害方法を際立たせている。

「子どもを6人亡くしました。娘が3人と息子が3人です。末っ子は生後3ヵ月でした。軍から逃げる際に、我が子と同じくらいの赤ちゃんを連れ出したんです。でもそれは人違いで、しばらくして私の子どもでないことに気づきました。その子どもも亡くなっていて、おなかが引き裂かれていました」

女性(35歳、マウンドー郡トゥラ・トリノ  
ミン・ジー・ユワ(Tula Toli/Min Gyi Ywa)出身、2017年9月14日)

「あの人たちが何か重いもので私の赤ちゃんを殴ったんです。頭に当たり、あの子は死んでしまいました。頭の皮が裂け、脳がこぼれ出ていました。幼い息子を亡くしました」

女性(25歳、マウンドー郡Tula Toli/  
Min Gyi Ywa出身、2017年9月16日)

**生き延びた子どもも年長者も暴力を免れたわけではない。**最近バングラデシュ入りした5歳未満児の15.3%および5歳以上の22.6%が8月25日から9月24日までの間に暴力を経験している。<sup>47</sup> 今回の大規模流入の当初から、MSFのクトゥパロン診療所では5人の6歳未満児を暴力関連の負傷で治療しており、そのうちの1人は銃創だった。<sup>48</sup> 同診療所では18歳未満の性暴力被害者37人もケアしており、そのうちの数人は若干9歳だった。

## 「ここの方が安全」——暴力の現場

MSFの行った調査の所見によると暴力は大抵、自宅(68.7%)か避難中(62.8%)に起きていた。<sup>49</sup> また、調査対象となった難民は暴力事件の発生現場として、職場(18.1%)、村、市場、店舗、学校など、その他にもさまざまな場所に言及している。<sup>50</sup>

「息子を探しに自宅に入ったところで突然撃たれ、弾丸1発が私の左脚を貫通しました。何秒か間があり、さらに1発がもう一方の脚に当たり、左脚と同じように貫通していきました。家の中で起きたことです。弾丸が自宅の(竹製の)壁を貫き、私の両脚にあたっただけです」

女性(40歳、マウンドー郡ボサラノ  
ター・ウィン・チャウン(Bossara/Tha Win Chaung)出身、  
2017年11月6日)

**証言を分析すると、ロヒンギャが自宅や地元の村など複数の場所で暴力を経験したことが確認できる。**またロヒンギャの談話からも、暴力がラカイン州北部の主要3郡(マウンドー、ブチドン、ラテダウン)の複数の村落にまたがって発生したことは明らかだ。

44 6件の調査で蓄積された結果に基づく数値。

45 クトゥパロンとバルカリのみで収集された情報。8月25日から9月24日までの50歳以上の人について報告されている死亡例の81.3%が暴力によるものだった。

46 6件の調査で蓄積された結果に基づく数値。

47 クトゥパロンとバルカリのみで収集された情報。

48 疫学週第34週～第48週

49 クトゥパロンとバルカリのみで収集された情報。

50 クトゥパロンとバルカリのみで収集された情報。

# 「皆が強姦被害に」

広がる性暴力の乱用

「拷問が始まったのは3ヶ月余り前です。軍は毎回80～100人の部隊で来ました。そして、一言も発さず、ただ金品と女の子を奪い去って行きました。高齢の女性たちが撃たれ、女の子が強姦される場所を目撃しています。あいつらは女の子の胸を抑え、服を切り裂き金目のものを探していました。それから、皆の目の前で強姦したんです。きれいな女の子が連れ去られることもよくありましたが、行き先はわかりません。解放されるか、何とか逃げ出した子もいます。そうして生き延びた子たちもどうなるか知りません。辱めを受け、おびえているので……。こちらに来た子もいるかも知れませんが、被害を口にはしません。言い争いになった際に、強姦被害を侮辱や攻撃のタネに利用されてしまうため、その体験を語りたがらないのです。未婚で貧しい子たちです。一度強姦に遭ってしまうと結婚もままなりません」

女性(ブチドン郡出身、2017年10月22日)

今回の危機の以前から、ロヒンギャの女性と少女はミャンマー国内で性暴力にさらされていた。2016年の軍の作戦でも何万人もが避難し、大勢の女性が強姦に遭ったという。このいわゆる掃討作戦が終結したとされる2017年2月以降は性暴力も減ったようだが、なくなったわけではない。8月25日以降にMSFのクトゥパロン診療所に医療処置を求めた相当数の性暴力被害者が、過去何ヵ月のうちに強姦されていた。

「以前もよく軍がやって来て、女性をさらって行きました。行方の分からない女性はたくさんいます。連中が山や密林で強姦するか、宿営地に連れて行ったんです。叫び声を聞いたこともあります。私たちはいつもおびえていました。男性が女性について尋ねたり、抵抗したりすると、問答無用で殺されました。きれいな女性は拉致され、家族は何も言えず泣き寝入りする他ありませんでした」

女性(ブチドン郡出身、2017年11月26日)

51 この数値のうち10%はバングラデシュの難民受け入れ地域の住民における「性別およびジェンダーに基づいた暴力(SGBV)」を生き延びた人びと

MSFの健康調査の所見はラカイン州北部のロヒンギャ女性および少女に対する性暴力の蔓延を裏付けている。先ごろの8月25日から9月24日までに避難して来た女性の3.3%が性暴力を経験ないし目撃しているが、特定の年齢層に限定されたものではなさそうだ。性暴力は偏見と汚名に結びつくため、報告が過少になりがちなことを考えると、前述の数値も過小評価されているかも知れない。性暴力はもっぱらミャンマー国内で発生しており、全報告例のうち97%がバングラデシュ到着よりも前に起きていた。

「あいつらはきれいな女の子を全員さらって行きました。100人ほどの女の子をまとめてです。その中に私の姪もいました。私たちはただ待ちました。怖くて抵抗できず、女の子たちを奪い返そうとすれば殺されることもわかっていたからです。その日の午後には皆、帰って来ましたが、何も尋ねませんでした。それでも拷問に遭った様子は見て取れました。衣服が切り裂かれていたんです。私は男性なので彼女たちの身に何が起きたかは言えませんが、理解はできます。彼女たちが語る必要はありません。私たちもわかっていますから。衰弱して歩けなくなってしまった人や、気を失ってしまった人もいました」

男性(ブチドン郡ワリ・ヤン/セイ・オー・チャ  
(Wari Young/Say Oh Kya) 出身、2017年11月26日)

MSFが8月25日以降に治療したSGBV被害者113人の年齢層は9～50歳。<sup>51</sup> 大半が強姦を受けていた。今回避難したロヒンギャ女性および少女の多くが8月から10月までの期間に被害に遭ったと報告している。犯人は大抵、複数だ。

「避難の2週間前の晩、軍が来ました。緑の制服を着ていたので、軍だとわかったんです。私が最初の被害者でした。モグ<sup>52</sup> たちが8時か9時ごろに私の家へやって来て、私を強姦したんです。何人に犯されたのかはわかりません。気を失ってしまったためです。ただ、確実に3人はいました。その後もまた、数日おきに2回やって来ました」

女性(ブチドン郡メイ・ルラー/ムイン・ルート  
(Mey Rullah/Myinn Hlut) 出身、2017年8月30日)

証言と、MSFが診療した性暴力被害者の談話によると、女性と少女が「連れ去られ」、時に「宿営地」や「軍の宿営地」と呼ばれる一般に知られていないような場所に集められ、強姦された事例は数多い。

「村ごとに10人の少女が宿営地に行かなくてはならないと軍から通達がありました。性暴力が目的なのでしよう。連れて行かれた少女は10代で、12歳から20歳前くらいではないかと思います」

女性(ブチドン郡出身、2017年10月19日)

証言からは実行犯の数は詳しくわからないが、その陳述は一貫しており、女性と少女が同一の場所で輪姦されるか、別々の人間に複数回強姦されたことを示唆している。「宿営地」もしくはその他の一般に知られていないような場所に連れて行かれたのち、複数の実行犯に強姦された、または複数回の強姦に遭ったという被害者たちにMSFはケアを提供している。

「軍が来て私たちの家に火を着け始めました。路上の女性をさらい、強姦した上に、胸を切り裂き、最後に殺していました」

女性(ブチドン郡出身、2017年11月26日)

複数の難民が、女性と少女の集団が強姦される場所を目撃している。ある事例では、子どもを含む家族が女性の強姦を見るように強制されていた。

「軍の男性が3人、自宅にやってきて、夫に『家にいる、モスクには行かなくていい』と命じました。それからナイフを喉に突き付けて脅したので、殺されてしまうのではないかと思い、怖かったです。私は寝そべるようにいわれ、服を脱がされ、夫と子どもと両親の前で強姦されました。あの人たちは私の家に5時間もいたんです。1人目が私を犯すのに1時間。それから2人目が30分。3人目は1時間半。私は目を開けていられませんでした」

女性(マウンドー郡Kwanse Baung/Kwan Thi Pin出身、2017年10月22日)

性暴力は、2017年11月のMSFの調査対象になった新たに流入した避難民の間で報告が上がっている死因の1つだ。8月25日から9月24日までの間、女性および少女の少なくとも2.6%が性暴力によって、または性暴力を受けたのちに亡くなったとみられる。<sup>53</sup>

「あの人たちは住宅から金品を奪い、3人の女性(うち2人は10代)を強姦しました。その後、その3人が亡くなっているのが見つかったので、私たちが埋葬したんです。私もこの目で遺体を目にしました」

女性(ブチドン郡出身、2017年8月23日)

8月25日以降にMSFが治療した強姦被害者やその他の難民の談話は、ロヒンギャ住民に対する広範囲の加害行為の1つとして、女性と少女の強姦など、時に命に関わる性暴力が意図的に用いられたことを指し示している。難民の証言の中には、強姦された上に殺害された女性や少女の報告もある。

「あいつらは学校にいた女性たちを拷問しました。私がそれを知ったのは叫び声が聞こえたからですが、現場を目撃した人もいます。1時間後、女性は皆、殺害されました。銃声が聞こえたんです。学校の中で何が起きているのか気になった人たちが見に行くと、軍はその人たちに向けて発砲を始めました。その日、100人以上殺されています」

男性(ラテーダウン郡ソー・パラン/ベット・レイ  
(Zoe Parang/Phet Leik) 出身、2017年11月4日)

52 ロヒンギャの人びとがラカインの非ムスリム住民の呼称として用いる言葉で、蔑称と受け取られることもある。

53 6件の調査で蓄積された結果に基づく数値。



8月25日の暴力の激化を受け、41万2000人を超えるロヒンギャがミャンマーのラカイン州からバングラデシュへと避難。新たに押し寄せた難民に先立ち、前年までも何十万人かのロヒンギャが国境を越えて来ている。新たに流入した難民の大半は住居、食糧、水、トイレが十分でない仮設居住地に身を寄せた。飲用水もわずかで、人びとは水田や水たまりや手掘りの浅井戸から汲んだ水を飲んでいるが、排泄物で汚染されていることが多い。クトゥパロンのMSF診療所では、9月6日から17日までに487人の患者が下痢性疾患で受診した。こうした仮設居住地とその周辺での食糧確保も信じられないほど脆弱で、新たに流入した難民は人道援助に全面的に依存している。市場の物価は急騰しており、道路が少ないため、最も脆弱な人びとのもとに到達することが難しい。ロヒンギャ難民を援助し、公衆衛生の災害拡大を回避するには、バングラデシュにおける人道援助の大規模な強化が必要だ。

# 「ここで死ぬ方がマシ」

帰還への不安

2017年10月16日から26日、MSFはウチパラン仮設居住地のロヒンギャ難民から新たに215件の証言を収集。ほぼ全ての難民が当面はこの居住地に滞在する意向だった。長期的にバングラデシュにとどまりたいかというさらに詳細な問いかけをすると、大部分の回答者がとどまりたい旨を明言した。バングラデシュがミャンマーよりも安全だからという声が大半だが、バングラデシュの方が自身らのためにいいという人や、バングラデシュを選ぶ明確な理由を挙げない人もいた。

一部の難民はミャンマーには何も残っていないと言い、財産や戻るべき場所を失ったこと、また、親類が皆亡くなってしまったことに触れている。喪失感や追悼の気持ちなどを引き合いに、「何もかも失ったのに戻る理由はあるのか」、「戻らなければならないのなら、ミャンマーでなく、ここで死ぬ方がマシ」などと、帰還を強硬に否定する人びとも少数ながらいる。

いくつかの条件がミャンマーへの帰還の前提として挙げられた。条件として求められたのは、ロヒンギャの身分が保障されるか市民権が認められること、権利と自由が保障されること、平和が回復されること、公正さが保たれること、「要求が受け入れられること」、「問題の解決策を見つけること」など。「散々な目にあってここまで来たんです。何の正義も果たされないまま、無理に戻さうとしないでください」

一部の人は安全への懸念が帰還を阻むと主張する。暴力全般を不安視する人もいれば、帰国すると殺害や迫害に遭うとおびえる人もいる。帰還することへの心配を特定の理由を挙げず口にする人もいる。また、決して帰りたくないという人もいる。「ミャンマーに無理に戻されても、私たちは帰りません。ここで死ぬ方がマシです。安全を著しく脅かされることになります。私たちの苦しみはおわかりにならないでしょう」

ミャンマー政府に対する不信感をあらわにし、傷が癒えるには時間がかかるだろうという人もいる。「ミャンマー政府は役者のように芝居をしています。私たちの帰還を歓迎するというのなら、それは嘘で、私たち(ロヒンギャ)の生き残りを殺すつもりなのです」またある人びとは根無し草のような気持ちだといひ、こう問いかける。「私たちはどの国の人間なのでしょう?」

# 結論

ミャンマーのロヒンギャは歴史的に、法制上でも実生活でも何十年にももの間、迫害と根強い差別に直面し、それが暮らしのあらゆる側面に影響していた。8月25日のアラカン・ロヒンギャ救命軍(ARSA)による警察・軍施設襲撃への対応とされる苛烈な取り締まりにより、ロヒンギャの苦痛は過去に例を見ない水準に達し、何千人もが命を落とし、この暴力を生き延びた人もバングラデシュへの避難を余儀なくされた。

MSFの調査は、ラカイン州における暴力激化ののち1ヵ月間で少なくとも9400人が亡くなったことを示唆している。このうち少なくとも6700人の死因が殺害で、さらにそのうちの少なくとも730人は5歳未満児だった。MSFの患者やその他の難民の談話から、起きた出来事の深刻さや残酷さが確認できる。MSFの調査の方法を踏まえると、死亡例の推計総数は控えめなものだ。しかし、ロヒンギャがラカイン州で国際人権法の広範かつ重大な侵害に苦しめられ、殺害や強姦その他のSGBVの標的となっていたことに疑いの余地はない。

今回の暴力と殺人の波は唯一の出来事ではない。MSFは、過去何年かにわたってラカイン州のロヒンギャに対し、さまざまな形態の暴力を振るおうという一貫したもくろみを目のあたりにしていき。あからさまな差別、迫害、土地のはく奪、殺害、村落や生業の大規模な破壊といった一定の形態が見られる。

相当数の第三者的組織が証拠を提示しているにもかかわらず、そうした暴力には一切の刑罰が適用されていない。ミャンマー国軍は自らが直接かかわっていないとして暴力を繰り返し容認し、軽視してきた。ミャンマーと協議する各国政府は、同国に課せられた制裁の解除に踏み切る一方で、民族的少数派の待遇から目を逸らし、少数派の待遇改善の程度と有無を評価する現実的な仕組みを整えていない。

8月25日に始まったバングラデシュへの避難の速度と規模が国際社会に状況の深刻さを告げる一方、独立した国際人道団体はラカイン州に立ち入れないため、一連の出来事の適切な調査と、事実の全容解明はまだまだこれからだ。その一方で、ラカイン州に残るロヒンギャは人道援助を切実に必要としている。

報告された死亡例の大部分は8月に発生したものが、MSFのデータは暴力が8月25日以降の1ヵ月に限られないことを強調している。難民の談話から暴力が10月まで継続していたことが確認でき、最近の難民とのインタビューから暴力、根強い差別的な施策、そして人権侵害が今なお続いている様子がうかがい知れる。

ミャンマーおよびバングラデシュ両政府の難民帰還協定<sup>54</sup>の署名は時期尚早だ。両国の署名した協定は、難民帰還の指針となる根本原則を概説するものであるにもかかわらず、セーフガードの詳しい記述がなく、状況に即したリスクも認識していないため、難民帰還に関する原則が十分に尊重されていない。ロヒンギャ難民はミャンマーに強制的に帰還されるべきではない。どのような帰還計画であろうと本格的な検討に先駆け、彼らの安全と権利が保障される必要がある。

54 2017年11月23日にミャンマー連邦共和国政府、バングラデシュ人民共和国政府によって締結されたラカイン州からの避難民の帰還に関する協定

## バングラデシュにおけるMSF

MSFは1985年に初めてバングラデシュで活動。2009年からはコックスバザール県のクトゥパロン仮設居住地のかたわらで診療所を運営し、ロヒンギャ難民と地元住民に包括的な基礎・救急医療のほか、入院治療や診断に必要な検査を提供してきた。今回、コックスバザール地方に大挙して押し寄せた難民のため、医療施設の増設と水・衛生設備などで活動を拡大し、活動規模を拡大している。また、バングラデシュ国内では、他に首都ダッカのスラム地区カムランギルチャルで、心理ケア、リプロダクティブ・ヘルスケア(性と生殖に関する医療)、家族計画、産前健診、工場労働者のための産業保健プログラムを行っている。

## ミャンマーにおけるMSF

MSFは25年前からミャンマーで活動し、保健スポーツ省とともにプライマリ・ヘルスケアや、HIV/エイズ、結核、薬剤耐性結核の患者のケアを行ってきた。2017年8月以前は、マウンドー郡の村落や国内避難民キャンプを対象に4件の巡回診療を展開し、プライマリ・ヘルスケアと、保健スポーツ省管轄病院への急患の搬送に従事。巡回先4カ所のうち3カ所が2017年8月25日以降に焼き払われた。シットウェー郡でもパウットー町とシットウェー町の国内避難民キャンプのほか、複数のラカイン人村落への巡回診療でプライマリ・ヘルスケアを届けている。その他のMSFプログラムにはヤンゴン管区、シャン州、カチン州、タニンダーリ管区のHIV/エイズ・結核プログラムと、チン州のプライマリ・ヘルスケアプログラムなどがある。

# 付録 1 : 調査方法

## 量的分析

MSFはバングラデシュのミャンマー国境沿いに位置するコックスバザール県下の複数の難民キャンプで合計6件の健康調査を行った。調査方法の詳細<sup>55</sup> や当該の調査で蓄積された所見の要約<sup>56</sup> を含む報告全編はMSFのウェブサイトで見ることができる。

6件の調査の第一目的は粗死亡率(特定地域の1日あたりの対1万人の死亡数)の推計と、5歳未満児の死亡率だった。これに次ぐ目的として、1) 対象集団の年齢、性別、家族構成の記述、2) ワクチン接種率の推定、3) 生後6~59ヶ月の子どもにおける重度および全急性栄養失調の有病率の推定、4) 調査直前の2週間に対象集団において最も有病率の高かった疾病の特定、5) 一次ケアおよび二次ケアの利用可能性に関して健康を求める行動の記述、6) ミャンマー国内の危機の前後に避難した新規の避難者とバングラデシュの仮設居住地に滞在する既存の集団について総人口および5歳未満児の粗死亡率の推計、7) 年齢層および性別ごとの主要な死因の特定、8) 暴力関連の事例に関する知見の取得、がある。

6件の健康調査のうち4件は2つの主要な仮設居住地であるクトゥパロンとバルカリで2017年10月30日から11月12日にかけて行われた。仮設居住地とその拡張区画の合計4627人の参加者を代表する905世帯が調査対象となった。

残る2件の健康調査はバルカリ2(旧マイネルゴナ)とタスニマルコナ(旧ブルマパラ)で2017年11月8日から12日にかけて実施。2カ所合計で参加者6799人を代表する1529世帯にインタビューを行った。

以上の調査は今回の大規模な避難でミャンマーのラカイン州からやって来たロヒンギャ50万3698人と、8月25日より前からバングラデシュ国内の仮設居住地に滞在していた10万4410人を代表するもの。8月25日から調査の実施時期までに約62万6000人のロヒンギャがバングラデシュ入りしたとみられ、MSFの調査は2017年11月までのミャンマーからバングラデシュへ新たに流入した難民全体の80.4%を代表していることになる。

クトゥパロンとバルカリで行われた調査の振り返り期間には、2017年2月25日からインタビュー日(2017年10月30日~2017年11月12日)までの期間が含まれる。バルカリ2とタスニマルコラで行われた調査では振り返り期間全体に2017年5月27日から調査日(2017年11月8日~10日)までの期間が含まれている。

口頭でのインフォームド・コンセント(十分な情報を伝えた上での同意)を本調査の全参加者から得ており、調査チームがこれを記録した。全ての参加者がわかりやすい言葉で調査について説明を受けている。いずれの世帯にも、調査への参加を任意のタイミングで取りやめることができると伝えた。調査への参加は自発的なものであり、回答者にはインセンティブや報酬は一切提供されないことも明示された。

55 下記リンク先で閲覧可能:

[http://www.msf.org/sites/msf.org/files/coxsbazar\\_healthsurveyreport\\_dec2017\\_final1.pdf](http://www.msf.org/sites/msf.org/files/coxsbazar_healthsurveyreport_dec2017_final1.pdf)

<http://www.msf.org/sites/msf.org/files/report-rohingyas-emergency-17-vf1.pdf>

56 下記リンク先で閲覧可能:

<http://www.msf.org/en/article/myanmarbangladesh-rohingya-crisis-summary-findings-six-pooled-surveys>

## 質的分析

MSFの人道問題担当チームがバングラデシュ国内で31人の患者および介護者と50人の難民に合計81件の半構造化インタビューを実施。このうち2人を除く全員が8月25日以降にバングラデシュに到着した。インタビューは全て8月16日から11月27日までの期間にクトゥパロンとバルカリの仮設居住地で行われた。

居住地は人口過密であるため、一部の難民のインタビューには家族や知人が居合わせた。その場合は、証言は主たる回答者から得られたものと見なし、その他の参加者による言い足しは聴取記録に追記した。

MSFの外国人スタッフによるインタビューは訓練を受けた通訳者を介して現地語で行われた。担当者は男女ともに、できる限り現地の文化に配慮する形でインタビューを進め、一部はバングラデシュ人の人道問題担当スタッフが直接現地語で実施し、それを英語に書き写した。

口頭でのインフォームド・コンセントを全ての回答者から得ている。調査の目的、インタビューは自発的に受けるものであり拒めること、いずれの質問にも回答を拒否できること、いつでもインタビューを終えられることが説明された。MSF診療所でインタビューを行った患者と介護者には、証言収集活動が治療とは関係なく、彼らが引き続きMSF施設に医療や心理ケアを求める上で何ら影響を及ぼさないことを丁寧に伝えた。

本報告書に掲載の証言引用箇所はインタビュー対象者の出身地を含む。ラカイン州北部の村落は言語によって呼び名が異なる。そのため、本報告書では、ロヒンギャ語の地名とラカイン語の地名を併記し、さらに当該の場所が属する郡 (township) も記した。難民から聞き取った村落の名前の中にはMSFチームが確認できなかったものもあり、その場合は、引用の参考情報に出身郡のみを記した。

## 追加資料

MSFの保健医療施設から得た医療データと、MSFの医師、看護師、助産師が患者から聞いた話も本報告書に収め、直接的な医学的観察による所見の裏付けを図った。

MSFは2009年からクトゥパロン診療所を拠点にコックスバザール県に駐在。この診療所は今回の大規模流入の始まりから1ヵ月の間にMSFが運営していた唯一の施設だったこともあり、銃創など暴力関連のけがを負った患者と、性暴力被害者の大部分を受け入れた。10月末以降に複数の施設が増設されたものの、正確を期すため、本稿で考察される医療データはクトゥパロン診療所の患者のものに限られている。

